

OPINION

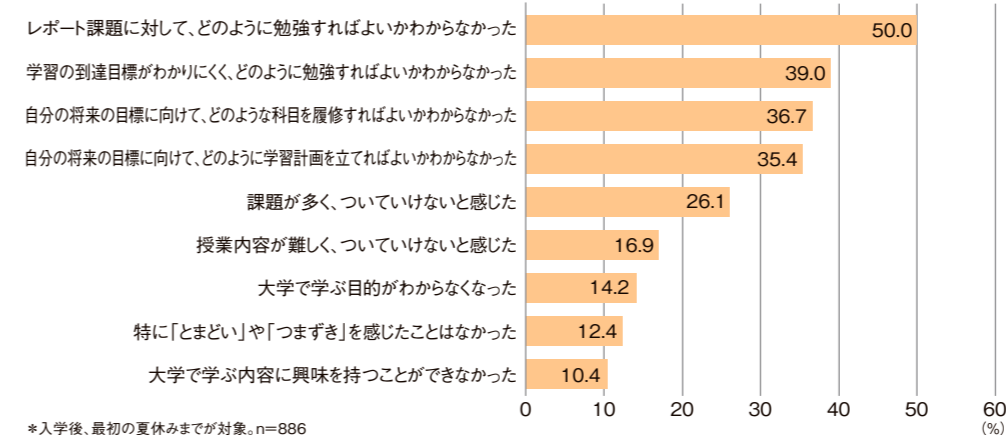
新課程入試への対応、増加する年内入試入学者、コロナ禍…
入学前教育を自学の教育のスタートラインに
 これからの時代に適した「攻め」の入学前教育を提案する。



(株)進研アド 高大接続教育部 部長
中井 利明
 なかいとしあき ●関西エリア、首都圏エリアでの大学支援や情報誌編集を経て、2021年より現職。高大接続やグローバル人材育成の領域を中心に、大学の教育プログラム設計支援に携わる。

取材・文/ 山田雄介

【図表1】学生が感じる「入学後のつまずき」(複数回答)



*入学後、最初の夏休みまでが対象。n=886
 進研アド「大学生の振り返り調査：大学生から見た高大接続期の学習支援への期待」(2021年)

【図表2】入学後のつまずき要因の整理

入学後のつまずき	要因	不足している要素
▶授業が難しくついていけない	▶高校までの学習範囲でのつまずき ▶基礎学力の不足	学力 大学の学びに堪える基礎学力
▶レポートへの取り組み方がわからない ▶どう勉強したらよいかわからない ▶課題が多くついていけない	▶学習方法の理解不足 ▶学習習慣の未定着	学習力 主体的に学び続ける姿勢と習慣
▶大学で学ぶ内容に興味を持っていない ▶大学で学ぶ目的がわからなくなる	▶学びのイメージギャップ ▶不本意入学	モチベーション 「なぜ学ぶか」の動機、期待

入学前教育でつなぐ入試と大学教育

私立大学の年内入試入学者の割合はこの3年間で約5%増え、2020年度は*約57%になりました。受験生の安全志向の高まり、新課程で推進される探究学習の成果を受験に生かす動きも高まると見られることから、この割合の増加傾向は続くでしょう。よって今後ますます、主に年内入試合格者に課される入学前教育の重要性が増してくる考えられます。

入学までの期間に行われる入学前教育の目的は、入学予定者をスムーズに大学の学びにつなげることです。【図表1】は、新入生のつまずきの内容を探った調査結果です。その要因を整理すると、大学の学びに堪える「学力」のほか、主体的に学び続ける姿勢と習慣の「学習力」、学ぶ動機や期待の「モチベーション」の不足に行き着き

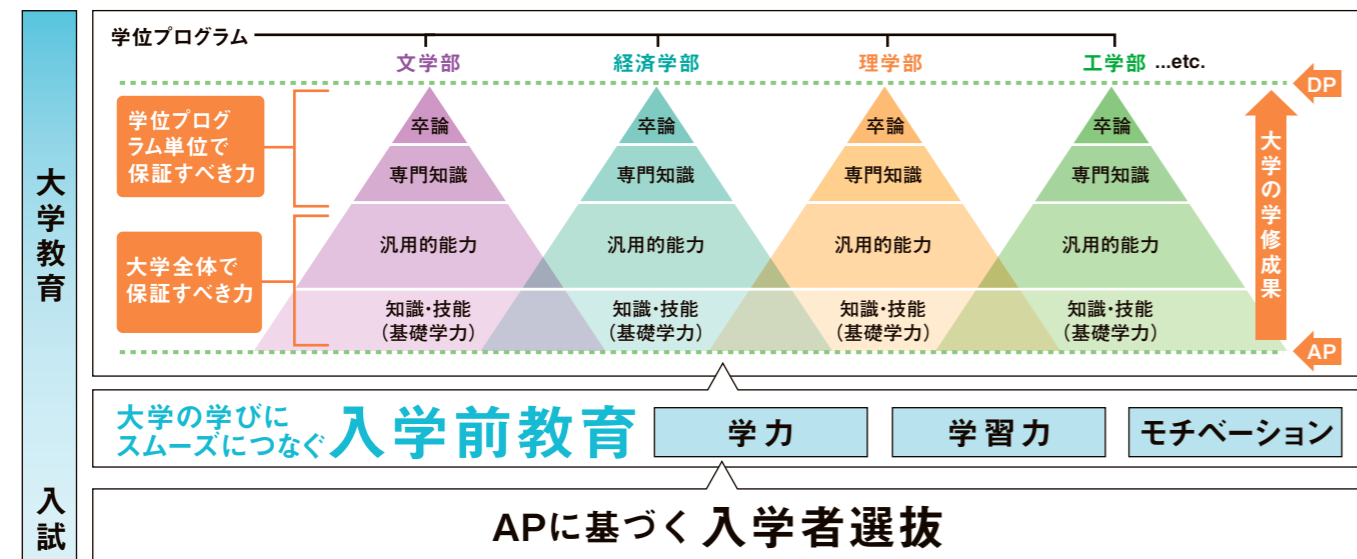
入学前に得たデータを教学IRの起点に

具体的に見直しポイントを3つ紹介します【図表4】。ここで挙げるポイントは、学生、大学教育の変化に左右されない普遍的な考え方になります。

まず「内容・形態」【図表2】で挙げた「学力・学習力・モチベ

*文部科学省調べ

【図表3】入試、入学前教育、大学教育をつなげて考える



【図表4】自学の教育のスタートラインにするための入学前教育見直しポイント

観点	内容・形態	活用	業務負担
ポイント	<input type="checkbox"/> 入学後に求められる力、学ぶ内容、学び方が理解できるか <input type="checkbox"/> 大学で学ぶにあたっての意欲や学習習慣が身に付くか <input type="checkbox"/> 入学までの期間中、継続的に学ぶしくみになっているか	<input type="checkbox"/> 個々の学生のデータを取得できているか <input type="checkbox"/> 得られたデータを入学後の教育や入試の検証に活用できているか	<input type="checkbox"/> どの部署が担当するか、押し付け合いになっていないか <input type="checkbox"/> 教材の中身づくりに手を取られ、学生の指導がなおざりになっていないか

「シヨンの」のバランスが取れたものになっているかどうか、がポイントです。高校の復習ドリルのようなものだけでは、「大学の学びは受験勉強と変わらない」という誤ったメッセージを送りかねません。大学が求める学びを伝え、高校までの学びがそこにどうつながるかを示したいものです。具体的な内容としては、汎用的能力や基礎学力などの「大学全体で保証すべき力」と、「各学部・学科で保証すべき力」の両方をカバーできると理想的です【図表3】。形態は、意欲向上の起爆剤としての「スクリーング型」と、継続的に学ばせられる「通信教育型」との併用が望ましいでしょう。コロナ禍で交流機会が減り、学生の帰属意識の向上が課題となっている現在、入学前から彼らとまめにコミュニケーションを取っておくことは、その対策の一つにもなります。

次の「活用」は、入学前教育を通じて得たデータを入学後の教育に活用できているか、です。年内入試の拡大により、入学者の学力、学習習慣、学習意欲は多様化しています。入学前教育で把握できた注意を要する学生については、早期に支援を講じたいところです。もとよりデータ収集は学修・教育成果の可視化のベースであり、学

修者本位の教育の実現に欠かせません。希望制ではなく、全員必修化して最後まで取り組ませれば、教学IRの起点にもなり得ます。

3つ目のポイントは「業務負担」です。プログラムの中身づくりに労力が割かれがちですが、中身は外部の教材を活用する方法もあります。むしろ大学は、より学生の指導に注力できるしくみを構築すべきではないでしょうか。多くの大学から、入学前教育の責任を担う部門が定まらないという声をお聞きます。見直しにあたっては、ぜひ入試担当部門が旗振り役になることをおすすめします。なぜなら入学前教育は、入試の検証にも活用できるからです。入学前教育で得られた学習結果やアンケート結果などを入学後のGPAや外部アセスメント結果と掛け合わせ、求めていた学生が獲得できているかを検証することで、入試の精度向上に繋げることが可能です。

入学前教育は、入学予定者が最初に触れる「自学の教育」です。大学の印象を左右する試金石であり、受講者の後輩や高校教員に評判が伝わる、つまり次年度以降の募集にも影響する重要な取り組みです。「選ばれる大学」にふさわしい入学前教育になっているか、いま一度、点検してみてください。

Between 情報サイト上の「電子ブック」では、2021年5月に実施した「経営教育・入試の好循環を生み出す」入学前教育」のセミナー動画を公開中です。